

## 小児科だより vol.26

### 周期性発熱症候群

2018.10.1 発行

こんにちは。だんだん日が短くなり、朝夕は涼しく感じるようになってまいりました。現在、小児科外来では、RS ウイルス感染症や胃腸炎などのお子さんが増えております。

当科では、今月中旬からインフルエンザの予防接種を開始いたしますので、お気軽にご相談頂けますと幸いです。

さて、今月のテーマは、『周期性発熱症候群』についてです。乳幼児が保育施設などで集団生活を始めたばかりの頃、お子さんが毎月のように熱を出して、復帰したばかりの仕事に結局半分も行けなかった、というお話を聞くことがあります。このような乳幼児の一般的な感染症（いわゆる風邪）で、説明のつかない発熱のエピソードを周期的に繰り返す症候群とされています。今回は、この症候群の中でも日本国内での報告がまれなものや、遺伝性のもものは割愛し、小児科の日常診療でも接する機会がある『PFAPA』について説明したいと思います。



『PFAPA』は周期性発熱、アフタ性口内炎、咽頭炎、リンパ節炎の英語の頭文字からとった名称で、平均発症年齢は2.8歳です。主な症状は39℃以上の発熱が3-6日続くエピソードを3-8週間周期で規則的に繰り返すとされて、アフタ性口内炎、咽頭炎、頸部リンパ節腫脹、腹痛などを伴うことがあります。発熱時の血液検査では、一般的な感染症のデータが上昇しますが、熱が無いときは正常になります。

診断は、5歳以前に始まる比較的規則正しい周期的な発熱であること、成長や発達は正常であること、上気道感染症（鼻水、咳、めやに、など）がなく、アフタ性口内炎、頸部リンパ節炎、咽頭炎のうち一つを伴うこと、血液検査での周期性好中球減少症の除外（詳細は、今回は割愛させていただきます）などから判断し、ステロイドが良く効くことも知られています。

治療としては、さきほど記載したように、ステロイドが良く効くとされていますが、次の発作までの間隔が短くなるとする報告もあります。その他に胃薬として使用する薬も使用することがありますが、発作を完全に消失させるのは1/3程度とされています。また、扁桃摘出術なども有効と考えられます。多くの例では年齢とともに発熱発作の間隔が長くなり、ついには発作が消失するとされており、予後は良好な疾患と考えられています。